

北部は、農業的土地利用と住宅地の共存地域であり、小面積の農地転用の累積により旧集落を利用しての発展で、景観的には台地上の一戸建て住宅地を形成した。中部の国鉄線に沿った地域は、商工業地域と住宅地が混在しており、人口密度も世帯数もたいへん多いが、住居の種類としてはアパート、借家の多い地域である。最後に南部の海に面した地域は、低湿地という郊外住宅地としてはマイナスの条件をもつため、最近まで経済的繁栄からとり残されていたのだが、地下鉄東西線の開通と土地区画整理事業によって、その都心への近接性を生かしてでき上がった新興住宅地域である。

市川市の基本的性格は、都心への通勤者のベッドタウンということで、あらゆる面で東京の力に包含されている。商業も盛んではなく、市としての地域力は小さい。このような中で、市川市の住宅地形成に関わる要因について考えると、都心への通勤者の居住地という性格から、通勤の時間的距離ということが一番の条件となる。そういった意味でも、行徳地区に東西線が開通したことによる影響は大きいと言える。また、国分地区と行徳地区の比較により、その土地条件の違いによって新・旧集落の立地形態が違ってくると言うことが明らかになった。

## 鈴鹿山地北西部におけるカルスト

平松 顕子

### ○研究の目的・方向

鈴鹿山脈は、本州中部を占め琵琶湖一帯の地狭部を擁するという地理的・地形的位置により、日本海側と太平洋側の気候が相互に強く影響しあい特異な生物相を現出するが、北部では石灰岩の分布する地域となっている。地域の自然環境を総合的に把握する地理学研究への第1歩の試みとして、本論文ではこの地域におけるカルスト地形（近江カルストと称すもの）をテーマに選び、その生成環境の追求に主な目的を置く。研究方向としては、地形面を単位として捉え、カルストと相関関係にある準平原との問題について、両者の関連性を確認し、その関連性を利用してカルスト地形の生成過程を調査する立場をとった。そして更に、いかなる自然環境を形成しているかを、人文生態の展開の面から考察し、この生成環境の特性を浮き彫りにしようとした。

日本のカルスト地形をその地形面、標高から区分し、近江カルストの位置づけを行なった。そして地形の調査に当たっては空中写真を基に野外調査をし、一部地域においては計測を加えた。

### ○結 果

近江カルストは、古生代石灰岩に発達し、それは、西南日本内帯各地に点在し石灰岩台地を形成している一連のものと岩相的に生成を同じくする。山頂の高位カルスト、山麓の中位カルストの二面に渡るが、この階段状の地形面は第三紀以降の構造運動によりブロックに切断された隆起準平原面であると解析し、カルスト現輪廻の開始期を、その地形降起とほぼ同時期と推定した。広く日本のカルスト地形と比較検討すれば、近江カルストの地形上の特色は、ドリーネの形態が円形の単純形を呈し、側壁急斜の樽状～漏斗状の小規模で深いものが卓越すること、高位カルストではドリーネ地が多数見

られること、森林伐採地に堆積地ドリーネが集中することに代表される。

カルスト台面は、わずかドリーネ・ウヴェーレ等に居住・耕作の場としての利用が見られたが、大部分森林であり、薪炭用材を提供する場となっていた。現在ではその樹木旺盛な自然環境の再認識に基づき、新しい適応形態として、林業開発の展開を見、スギ・ヒノキの植林が進行している。これは、他のカルスト地域における草原利用あるいは耕地開拓という形態と比較すれば、極めて特異な存在である。

近江カルストにおける一般性については、主にロックコントロール、地形的制約が明らかに認められるが、上述のごとき地形的特徴・カルストと森林との結びつきに見られる特異性については、種々の生成因子のうち、他の因子による影響の大きさが考えられる。それを、気候——年間の降水量配分の均質性、積雪をみるという特異性を有す——であると予想するのであるが、本論文では実証的解明には至っていない。

従来、地中海地方のタイプから、幼年期にあると説明されたままになっている近江カルストであるが、その発達過程の再検討をする必要があり、それには今後、気候因子を重視し定量的分析を推し進めたい。

## 蘭業における生産流通構造の地域性

### —岡山県都窪郡早島町と熊本県八代郡千丁町の比較研究—

藤 沢 弥 生

蘭業における生産流通構造の地域性について、岡山県都窪郡早島町と熊本県八代郡千丁町をとりあげ、具体的な項目別に比較検討を行なった。

岡山の蘭草は、熊本の蘭草に比較して、質が良く、反当収量、単価が高く、粗収益が多い。しかし、岡山の蘭草生産費に占める労働費の比率は熊本に比べて高い。従って熊本の蘭草は、粗収益が少ないにもかかわらず利潤が多い。

岡山の蘭草は、一戸当たり作付面積は少ないが、蘭草の質と量を高め、所得を追求する経営であり、熊本の蘭草は、設備投資を行い労働力を節減し、規模の拡大をはかる、利潤追求型の経営といえる。

岡山の蘭作地域においては農業と加工業の分化が進展し、農民的加工の外に、零細工業が相当成立しているが、熊本では、生産加工一貫形態が大部分である。加工業の多くは、原草移入により畳表加工の付加価値を形成している。

現在の流通の概要は“生産者（加工）→産地問屋・共販→消費地問屋→畳屋”の流れが主力になっている。

価格形式には供給、すなわち全国蘭草作付面積の増減が直接的に影響するものの、各流通関係者の思惑や経済的な力関係によって異った価格を形成する。

このような生産流通構造の中で、岡山県の蘭草生産は昭和39年をピークに減少を続け、熊本県は昭和43年に岡山を抜いて以来全国一位の生産を維持している。